

【研究ノート】

ハイブリッド化する社会における固有性について

栗原 孝

はじめに

社会とは、たんに人間と人間の関係であるのではなく、自然と人間が作り出してきた物=モノ、人間=ヒト、その考えや行為・その様式・きまりなど=コトの総体としてあると考えられる。そして、モノ、ヒト、コトは、多くの社会間で、相互に伝えられ混合してきた歴史を持つ。個々の社会の歴史においても過去と現在のものが混合されている。また現在は、サイバー空間とリアル空間が、その境界をこえて、ハイブリッド化を高度に進めている。そして、こうしてつくられたハイブリッド体が出会い、つながることが、新たな可能性や想定外の不都合な結果をもたらすと考えられる。

筆者は栗原 2019 において、社会のハイブリッド化を以上の視点からとらえることを試み基本的な考えを示した。その要点は以下の4点である。

- (1) 社会はモノ、ヒト、コトのハイブリッドな構成体である。
- (2) モノ、ヒト、コトそのものが、それぞれを内包するハイブリッドとして作られる。
- (3) 具体的なモノ、ヒト、コトは固有性を持つ。
- (4) 偶然性、ヘテロジェニティの可能性を持つ。

本稿は、筆者のこれまでのハイブリッド社会についての論考（栗原, 2018, 2019）を補充するとともに、経験的研究に向けて歩みを進めるために、ハイブリッド化における固有性について考えるものである。なぜ固有性か。それ

は、経験的に触れる対象は固有なもの、独自のものであり、固有で、独自でしかないと考えるからである。

具体的には、上に示した4項目のうちの(3)を中心テーマとするが、このテーマを扱う前提として、まず(1)と(2)を再整理・補足し、その上で(3)を考えることにしたい。そしてそれを、ブルノ・ラトゥール (Bruno Latour) のアクターネットワーク論 (Actor-Network Theory)、マヌエル・デランダ (Manuel DeLanda) の集合体論 (Assemblage Theory)、グレアム・ハーマン (Graham Harman) のオブジェクト指向存在論 (Object-Oriented Ontology) に学びつつ行うことにする¹⁾。社会的実在や社会がハイブリッドに作られることについて、これら各理論は同じように考えつつ異なるアプローチをしている。また、本稿がテーマとするハイブリッド化における固有性についても、異なる理解を示している。当然ながら筆者のハイブリッド社会論とも異なる。そこには、哲学と社会学の発想の違いからくるすれ違いもある。しかし、興味深い視点と思考を取り出すことができると考える。

1. 社会はモノ、ヒト、コトのハイブリッドな構成体である

(1) モノ、ヒト、コトとは

最初に、社会およびその構成要素がハイブリッド化されている状態をとらえるために、モノ、ヒト、コトというカテゴリーについて、整理しておく。これらはそれぞれ、自然・物、人間、行為様式・きまり・考え方などに対応させたものであり、以下のように措定している (栗原, 2019, 56)。

- ・モノをモノならしめるのは、マテリアルとモノとしてのアイデンティファイである。
- ・ヒトをヒトならしめるのは、生命とヒトとしてのアイデンティファイである。
- ・コトをコトならしめるのは、現象、動作、考えなどのまとまりとコトとしてのアイデンティファイである。

それぞれについて、説明を加えよう。

モノを規定するポイントはマテリアルであること、物質性を持つということである。しかし、物質がどのようなものか、どのようなものであり続けるのかは、モノとしてのアイデンティファイの仕方によって変わりうる。それは歴史的な経過の中で変わりうる。日常的に身の回りにあるモノやデジタル化、サイバー化されたモノは、器具、器材、ICチップなどのハードの物質性が基準となろう。では物質そのものの基準はどうか。原子レベルでとらえるのか、分子レベルでとらえるのか、原子単体でとらえるのか、原子の集まり・集合体でとらえるのか、異なる複数の分子の集合体でとらえるのかなど、とらえ方は異なる。それによってアイデンティファイのあり方は変わりうる。

ヒトを規定するポイントは、まず生命体であることである。生命体であるとは身体というモノであることで、その身体はたくさんのモノとしての部分・要素を持つ。そしてその部分・要素の複雑な働きの体系が生命を維持する。このモノとしての身体・生命体を維持する働きのまとまりは、モノの為すコトと考える（モノの動き・働きのまとまりをコトと考えることについては、後述する）。すなわち、モノとしての生命体は、モノとコトの両面を持つ。加えてヒトは、行為する、感情を持つ、思考する等のコトを為す存在である。この心的、社会的コトは、モノの為すコトとつながったものである。以上、ヒトは、モノとモノの為すコト、そして心的、社会的コトの統合体と考えられるのである。

そしてコトである。コトは、様々な意味、領域にわたる内容を持つ。それらを一つのカテゴリーにまとめるには無理があると考えつつ、あえてまとめていく。その趣旨を簡単に示しておく。

人間は、モノの、ヒトの、さらにその相互の多様で錯綜した動きや働きに一定のまとまりを見いだす、作りだす、そして維持するなどしてきた。これは自然の現象についても社会現象についてもあてはまる。例えば日本では、雷の光、音、雲、雨、落雷によって起こる火災、死などの個別の現象とそれ

らのつながりのまとまりを「雷神」とその所業と意味づけた。現代では、光は波動と粒子の現象に波動説、粒子説が説かれる。ヒトとの関わりにおいて為すべきこと、為してはならないこと、為すべきではないことのまとまりを定めて、きまりとしてきた。そして今や、コトは、上記のようなモノとヒトの変化によって、まとまりのありかた、作られ方、維持のされかたが変わりつつある。モノ、ヒト、コトの理解を、抽象的に、その基本的なポイントに限って措定するのは、それぞれが従来の境界を越えて多様に作られるこの現状に対応するためである。

(2) モノ、ヒト、コトの相互内包関係

人間は自然の中でそれに働きかけ糧を得、道具を作り、考えや社会のしくみを作ってきた。実はそれは、自然を作り変えると同時に自らの身体や考えを作り、人間の共同のありかたを変えることであった。言い換えれば、自然に人間の活動の跡、考えを内包させ、と同時にその活動や考えの痕跡を身体に内包させ、また、その自然と身体のある方を、考えや行為の様式に内包させてきた。モノ、ヒト、コトは、相互に入れ子細工のように作られてきたのである²⁾。

それは、モノ、ヒト、コトが、それぞれに他の側面を持つハイブリッド体であることを意味する。

例えば、自動洗濯+乾燥+省エネの洗濯機は、洗濯物を手で干す、あるいは乾燥するために乾燥機に入れる作業=コト、さらに電気代を節約するという新しいコトを内包した新しいモノとしてつくられている。そして、内包されたコト=作業、工夫の仕方などを不要とし、労力と時間を他に振り換えることを可能にする。これが、ヒトを新しくする。内包されたコトに必要であった身体の使い方、工夫の仕方を身につけないヒトとなる。代わりに、新しい身体の使い方、工夫の仕方を身につけるだけでなく、労力と時間の使い方を新しく考えて行こう。そのためのコトを身につける新しいヒトとなる。再ヒト化である。その際、ここではさらに追究はしないが、省エネというコ

トは洗濯機の範囲をはるかに越えたモノ、コト、ヒトの変化を引き起こすであろう。

この関係は、脱モノ化、脱ヒト化と再コト化という現象も引き起こす。まず脱モノ化である。多機能の器具、機械によって複数のコトを統合＝再コト化するようになると、統合された個々のコトを内包することで存在していた諸々のモノは不要となる。次に脱ヒト化である。これは、一般的には、コトを為すのに必要なヒトをモノによって置き換えること、現代では、ロボット化、AI化によってヒトが不要になるようなことを例として理解されるが、脱ヒト化の意味はそれだけではない。身体の使い方、工夫の仕方を失うことでもある。つまり、社会的コトの相だけでなく、心的相にも身体の為すコトの相にも影響を及ぼす。心身の活力、身体の為すコトの基礎的な力を失うという、脱ヒト化にもつながるのである。

他方で、モノ化による再コト化は、以上のような脱ヒト化ではなく、新しい再ヒト化の可能性を開くとも言われている。現在は、スポーツの限界状況における能力の開発のためのトレーニング器材・器具や、サイバー空間、ヴァーチャル機器を活用した仕事、芸術などのように、新しいモノが、身体の為すコトだけでなく、心的、社会的コトを新しくする可能性、あるいはこれまで開発されていなかった能力、身体の為すコトを生かす可能性が説かれる。

ここで大切なのは、このモノ化、脱モノ化は、再コト化、再ヒト化の一方的起因ではなく、再コト化や再ヒト化を動因として行われている、さらにそこには循環した関係があるということである。それが、次のモノ、ヒト、コトの内的なハイブリッド構成がいかに作り出されるかに関わる。

(3) モノ、ヒト、コトのハイブリッドな構成

モノ、ヒト、コトについては、それらの内的なハイブリッド構成、言い換えれば、モノのモノによるハイブリッド性、ヒトのヒトによるハイブリッド性、コトのコトによるハイブリッド性もとらえておかねばならない。

モノはモノのハイブリッド体である。日常的に身の回りにある人間が作り出したモノは、何らかのコトを内包させるために素材、大きさ、重さ、色、形などを考えた異なるパーツを組み合わせて作られている。家具、食器、家、車、道路等々をはじめ、あらゆるモノがそうである。都市、街並などは、それぞれ独立した、多様、多種のモノの集まりである。これら人間のつくり出すモノの資源、素材ともなる自然は、分子レベルからハイブリッドである。諸々の自然物、生物は、さらに複雑なハイブリッド体である。

ヒトはどうか。ヒトの身体はモノとして、細胞、組織をはじめ、各種の骨、筋肉、皮膚、様々な臓器など、複雑な組成体からなる、すなわちモノのハイブリッド体である。加えて、その身体の為すコトは、基礎的な反応であっても、生体分子単体ではなく生体分子間の相互作用、すなわち作用のまとまりである。心的、社会的コトの相においても、社会的なコトを内包化して独自のハイブリッド化を進める存在である。

コトは、個人の単純な行為であれ諸動作の複雑なまとまりであり、さらにモノ、ヒト、コトを対象とする行為は、特定の他者や多数の人の考え方や、きまりのまとまりなどを、それぞれに独自に解釈、取捨選択し、踏まえて遂行される。社会生活は、コトの相でとらえれば、このような様々なコトの、そのまた組み合わせ、さらにその出会いで成り立っている。サイバー空間はまさにコトとコトの出会いの場であろう。この出会いが様々な現象として現われる。この現象が何らかのまとまりを示す、あるいは何らかのまとまりが見いだされるなどしてアイデンティファイされると、社会現象として認知されるのである。

以上のモノ、ヒト、コトの内的なハイブリッド構成は、先の内包関係の構成と相対的な関係を持ちながらも、ズレを生む可能性があると考えられる³⁾。

2. モノ、ヒト、コトの存在の様々なとらえ方

さて、以上のように二つの側面でもとえられるハイブリッド体としてのモ

ノ、ヒト、コトであるが、それが固有性を持つとは何を意味するのか。固有性とは、対象を固有であるとアイデンティファイすることによって特定されるものであると、とりあえず考えておくとして、対象をどのようにとらえるかを明らかにしなくてはならない。それについては、いくつかの考え方があ

る。取り上げたいのは、まず、マヌエル・デランダの集合体論である。デランダによれば、「社会的実体は完全には心から独立しているのではない」が、「人の心がつくりだす観念とは独立している実在性がそなわって」おり（デランダ, 2015, 5）、この実在的社会存在の存在は「集合するという客観的な過程にかかわる」（デランダ, 2015, 8）。また、社会は内在的要素、すなわち諸集合体の有機体的全体（内部要素が密接な連関を持って位置づけられる全体性）を持つものではなく、相互に外在的な諸集合体の集合体であり、ミクロからマクロに至る諸々のレベルの、「諸部分の相互作用からその特性（properties 筆者加筆）が創発（emergent 筆者加筆）」（デランダ, 2015, 12）した集合体のまとまりで、すき間をもったものである。

まとめると、社会は、観念的に存在するのではなく、集合するという客観的な過程によって実在する、相互に外在的な集合体の相互作用によって生まれた特性を持った、ハイブリッドな集合体であるということである。

では集合体はいかにして構成されるか。それは構成する要素の役割、すなわち物質的役割（material role）と表現的役割（expressive role）によって説明される。物質的役割とは、身体、建物や道路、商店街や市場などの物質的なものだけでなく、例えば、会話における、会話の進行を可能にするのに必要な注意と関与、労力（デランダ, 2015, 104）、組織における、厳格な空間・時間的区分、監視、規律、記録など（デランダ, 2015, 140）、国家における、軍、警察、大統領や国会議員が持つ様々な権限など（デランダ, 2015, 165）の集合をつくり継続させる力（capacity）の側面を意味している。

対して表現的役割とは、言語やシンボルだけでなく、姿勢、服装、顔つきなどの身体的表現や言い方、話題の選択などが、人格や名声や印象を現わす

(デランダ, 2015, 24-25)、約束や誓いだけでなく相互扶助の行動が連帯感を表現する(デランダ, 2015, 25)、建物の外観や装飾、道路の狭さ、複雑さなどが地区の個性を表す(デランダ, 2015, 188)、といった力の側面を意味している。

そして、この物質的役割、表現的役割を持つ構成要素が、集合体の領土化と脱領土をもたらす。領土化とは集合体の内的同質性を高め、境界を強めて安定化させる過程である。人が特定の場所に集まり、民族的に棲み分けて住み、組織が特定の建物の中にあり、国が地理的境界を持つ(デランダ, 2015, 25-26)などが、その例である。この領土化を安定させる構成要素としては、身体、建物、道路などの他、習慣や日常的律動、伝統、さらに規範、法、憲法、地域のネットワークの中心の存在、言語、団結心、忠誠心、愛国心などが挙げられる。これに対し脱領土化とは、境界を不安定化したり、内的異質性を高めたりする過程で、社会的移動、世俗化、輸送とコミュニケーションの技術(デランダ, 2015, 11)、所得・教育・公衆衛生などの社会的資源の不平等・制約(デランダ, 2015, 118)、階級を超えてひろまり階級関係を曖昧にする流行(デランダ, 2015, 185)などが、その例として挙げられる。

加えて、デランダは、領土化に同一性を与え固定する過程としてコード化(デランダ, 2015, 28)、柔軟に作動するための自由を与える過程として脱コード化(デランダ, 2015, 34)を挙げる。これらの過程には、情報のパターンが一定の線形性を持って体系化=コード化されたものである、遺伝子コードと言語という二つの特殊な表現媒体が関わる。これら表現媒体は同一性だけでなく、環境や制度の具体的な相互作用の多様性を通して脱コード化をもたらしもする(デランダ, 2015, 28-29)。そしてこの変化は複雑で多様性を持ったものになる。そこでデランダは、物質的な線形的因果性だけでなく、表現的な要素がもたらす非線形的因果性を組み込んで考えることが必要であると述べている。

まとめると、集合体は物質的役割と表現的役割=意味や意義を役割を担う構成要素のハイブリッド化によってもたらされるもので、それは領土化/

コード化、脱領土化/脱コード化という過程としてとらえられる。デランダは、このような思考の上に、物質的な物、人間、規範、組織、都市、国家などをハイブリッドな集合体としてとらえ直そうとするのである。

以上のデランダの議論は、本稿のテーマにとってどのような意義を持つであろうか。デランダは、ハイブリッドな集合体としての社会という視点から、これまでの社会学の蓄積を読み直す上で必要な項目と論点を示していると考ええる。デランダが挙げた、集合体、領土化の例は、筆者のハイブリッド体としての対象の構成の姿と重なるものである⁴⁾。また、集合体の構成要素を物質的役割、表現的役割という視点から整理しているが、これは本稿でいうモノのマテリアリティ、モノにおけるコト、ヒトにおけるモノのマテリアリティ、モノが為すコト、そしてヒトとモノとがつくりだすコトにおけるコトについて、この二つの側面があることを示していると理解できる。この二つの側面を考えることは必要であろう。ただし、この二つの側面を考えるには、逆に、個々の要素について、上述したハイブリッド化の二つの側面（相互内包関係、内的ハイブリッド構成）がどのように関わっているかをさらに分析的にとらえることが必要になると考える。また、デランダは領土化の例として、人が特定の場所に集まり、民族的に棲み分けて住み、組織が特定の建物の中にあり、国が地理的境界を持つことを挙げているが、そこにICT、サイバー空間がどのように関わるか、領土化/脱領土化にどう関わるかという様相については、少なくとも、どちらかという歴史的な同一性を対象としている今回対象とした研究においては扱われていない⁵⁾。

ところで、デランダの“社会存在”は“実在”するもので、非実在的なものではない。それゆえ、本稿で言うコトの広い内容の一部が振り落とされる可能性がある。それはどのような部分か。この点で興味深いのがグレアム・ハーマンのオブジェクト指向存在論である。ハーマンは、実在するものと非実在的なものとを共に対象（object）として扱う考えを展開している（ハーマン, 2017, 13-14）。そしてデランダと非実在的なものについて議論をしている。この対論でハーマンは、デランダに、幽霊や神霊のような実体も物質性

もない存在をどう扱うのかと問う (DeLanda and Harman, 2017, 10.)。これに対しデランダは、存在はパターン化された物質 - エネルギー性を基礎とするとして、このパターン化された物質 - エネルギーの世界を超越した実体を否定する。そして、小説・物語は、物理的しるし (inscription) および舌と口蓋でかたちづくられた空気の振動を物質的基層として、単語、意味、統語の各層の上に、本当であれフィクションであれ物語りを創造する層があって生まれるものであると答える (DeLanda and Harman, 2017, 20)。ハーマンはこれを批判する。ハーマンは、対象を究極的には原子レベルにまでいたる構成要素に還元して説明する考えを否定し、また対象を経験的に得られる性質の束や他の事物への影響や関係の束に還元して説明する考えも、またこの二つを組み合わせた考えも否定する (ハーマン、2019、17-23)。「あらゆるもの (everything 筆者加筆) には、どんなにはかないものであっても自律した本質があるとするのである (ハーマン、2019、27)。

この視点に立ってハーマンは形相に着目する。形相とは、感覚的对象 (sensual objects 筆者加筆) が持つ「対象がそれ自身として認知されることにとって決定的な諸性質」(ハーマン、2017、165) である。その性質 = 実在的性質 (real qualities 筆者加筆) は、実在的对象 (real objects 筆者加筆) の本質となり得る可能性をもつものである。しかし、実在的对象はそれによって説明しつくされることはない。また、「感覚的对象」は、対象の感覚的にとらえられる様々な具有的特徴である「感覚的性質 (sensual qualities 筆者加筆)」とは切り離されはしないがそれに解消されないものである (ハーマン、2017、198)。平易に言えば、リングについてそれが何であるか性質を挙げることによって、その本質の一端に言及することは出来るかもしれないが、それによってリングの本質は語り尽くされず、またリングは、光の当たり具合でつやつやして赤く見えたり、鈍い赤みを帯びているように見えたりと変わりうる感覚的性質には関わりなく、感覚的对象としてあるということである。ここで形相とは、感覚的对象としてとらえられるリングが持つ、特にリングらしさを現す性質である。

DeLanda and Harman, 2017 では、形相 (form) を巡って次のような対論が行われている。デランダは、形相を持たない物質はないが物質のない形相はなく、形相の変化は物質の集合体の創発によって現われるものであるとする。対してハーマンは、形相を持たない物質はないが物質性のない形相はある、形相の変化とは、別の形相として現われることであるとしている (DeLanda and Harman, 2017, 20-23)。具体的には以下のようなことである。液体の水、氷った水、蒸気となった水は、すべて水なのかそれとも別物か。デランダは、それらすべては水であり、液体の水、氷、水蒸気は水の状態変化であり、加えて、その変化は圧力が変わると現れ方が違うとする。対してハーマンは、それぞれは別の形相を持つ別の対象であり、それらは、対象の構成要素が創発した形相であるとする (DeLanda and Harman, 2017, 66-67)。つまり、ハーマンにとって形相の変化=異なる形相は、それぞれが別の対象を意味する。それゆえ、たくさんの対象が存在することになる。もう一例を挙げるならば、ナイフはケーキを切るのに使われる、楽器として使われる、取引の品となる、殺人の武器にもなる。ではナイフは同一の対象か、ハーマンは、それぞれがナイフと他の何かが構成した新しい対象であると考えてるのである (DeLanda and Harman, 2017, 68-69)。

これをデランダは対象の増殖 (multiply objects)、物象化、存在論的インフレーション (ontologically inflationary) (DeLanda and Harman, 2017, 66-67.) と指摘する。後にみるようにハーマンは、たくさんの対象には持続性、重要性に違いがあるとしてインフレーションの指摘を回避する。だが物象化については肯定的に考える。実在的性質、ひいては実在の対象との関係こそがハーマンの関心の核であるからである。

本稿の視点では、仮にインフレーションとなっても、対象の出会いによって新しい対象が生まれるという視点は重要である。例えばナイフが殺人の道具として用いられた場合、それは、ナイフと殺人という特定の対象の関係、すなわち対象が生まれたと考える。もちろん、デランダに沿って、鋭い刃を持つナイフという存在が、別の対象との関係において多様な作用を持つ

であり、それがナイフの持つ能力であるとも考えることもできる。としても、ハーマンの、対象の本質を考える、そのためにあたらしい形相の多様性に着目するという視点は、抽象度は異なるが、本稿の、特に現代のサイボーグ化、AI活用、ゲノム編集などによる、モノ、ヒト、コトがモノ、ヒト、コトでありながら境界を越えて様々なモノやヒトやコトとしてつくられる現象をとらえる視点と重なるものであり、モノ、ヒト、コトの間の、さらにそれらの内的要素間の境界をめぐるアイデンティファイを問う際に、做うことができると思われる。また、筆者の試論（栗原, 2018, pp35-39）の視点とも通じるものである。それに、そもそも社会学においては、人々が実在、非実在を問わずさまざまなコトを見だし、考えだし、共有し、物象化し、ひいては、非実在の存在を実在化・モノ化する現象そのものが重要な研究対象となる。デマ、フェイクニュース（づくり）、アイドル（づくり）、アニメのキャラクター（づくり）、キャラクターグッズ（づくり）など、物象化のインフレーションを視野におさめるという意味において意義深いと考える。これは、モノ、ヒト、コトの生産において、ハイブリッド化の二つの側面（相互内包関係、内的ハイブリッド構成）がどのように進められるかが現われる場面でもある。

とはいえ、ハーマンの先に挙げた「ナイフと他の何かが構成した新しい対象」という理解では、新しい対象がどのように構成されるのかが不明である。ナイフと何らかの対象のつながりを考えるには、ハーマンが否定する上記の“対象を経験的に得られる性質の束や他の事物への影響や関係の束に還元して説明する考え”に近づくことが必要と思われる。

この点で注目したいのがブルノ・ラトゥールのアクターネットワーク論である。ラトゥールは社会、そしてそれを説明する社会規範、社会法則、社会構造、社会的要因、社会秩序、宗教、組織、文化、その他諸々の、これまでの社会学が扱ってきた「社会的なもの」のカテゴリーを括弧に入れ、人間と非人間、すなわち、自然、その他、ありふれた対象、外国風の技術、あらゆる類いの文書、動物（Mike Michael, 2017, 5）の動的ネットワークの集合体

(collective) によって組み直す (reassembling) ことを提唱する。そしてそれを、つながりをたどること (tracing of association) によって遂行しようとする (ラトゥール, 2019, 17, 242)。

ここでラトゥールが、デランダの集合体 (assemblage) の構成要素、ハーマンの対象を、モノ (object, thing) やグループ、さらにアクターと呼ぶなど、カテゴリーに相違があることに注意しなくてはならないが、重要なのは、ラトゥールがモノやグループはつくられることによって存在が現われ、維持する動きがなければ存在を維持できない (ラトゥール, 2019, 72) とすることである。モノ、グループがつけられるとは、他のなにものかとの関係やつながりが生まれる、そこに何かの違いが生まれる動きがおこることである。

この動きにおいて、モノ、グループを構成する要素 (人間・非人間を問わず) はあらかじめ決まってははいない。当該の課題、関心に応じて、参加することで現われる。ラトゥールはこの参加メンバー (participant 参与子) をアクターと呼び、なぜそのアクターが参加するかについては、そのアクターが、そのモノ、グループの形成に必要なエージェンシー (=何かをする・作用する・効果を生むもの) を担っており、エージェンシーに動かされているからであるとする。動くネットワークとはエージェンシーの作用のネットワークでもある。それは既存の外在するネットワークではなく、ワークネット、もしくはアクションネットとして現われるものである (ラトゥール, 2017, 250)。

この際のワーク、アクションとはいかなるものかについても留意が必要である。ネットワークにおいてアクターは「効果や影響を変換せずただ移送するのではなく、分岐点になったり、出来事になったり、新たな翻訳の起源になったりする」(ラトゥール, 2019, 243, 201)。つまり、インプットが決まればアウトプットが決まるように、意味や力をそのまま伝える「中間項 (intermediaries)」ではなく、「自らが運ぶとされる意味や要素を変換し、翻訳し、ねじり、手直しする」(ラトゥール, 2019, 74)、「媒介子 (mediators)」

として参加する。ネットワークとは、「各々の参与子が一人前の媒介子として扱われる行為/作用の連鎖」(ラトゥール, 2019, 243)なのである。

また、ネットワークは、ローカルな場だけで完結するわけではないが、「『ローカルでない』と呼べる場所は存在しない」(ラトゥール, 2019, 345)としていることにも留意したい。「ローカルな場は、別の場所、時間、エージェンシーを介して何かをするように作られている」。だから、それらに「至る道を切れ目なく結びつけなければならない」(ラトゥール, 2019, 333)。だがローカルな場は、それによってどこにもないどこかにつながることで脱ローカル化されるのではない。どこか別の場につながることで脱ローカル化される。つまり、特定の場のアクターの集まりは、別の多くの場でのアクターの集まりとつながる、すなわちネットワークがつくられるのである(ラトゥール, 2019, 345)。中空のグローバル空間はない。グローバル空間はローカルのつながりの空間なのである。

ここでモノ、グループ、アクター、ネットワークについて、さらにいくつか留意しておきたいことがある。まず、ラトゥールは、モノを object とも thing とも、時としてアクターともしている。ここでモノは、グループとは別のもんとして扱われているかに見えるが、そうではない。モノもグループであり、グルーピングされるのである。ちなみにラトゥールは、「自我」は両親、教師、仲間等々とのつながりのグループであり(ラトゥール, 2019, 62)、「ネットワークは<存在>で溢れている。機械を見れば、主体や人間集団を満載している」(ラトゥール, 2007, 118)と述べている。

またラトゥールは、モノがつくられる過程、グルーピングこそがとらえられるべきとしているが、作られ恒常化し安定したモノ、グループに目を向けていないのではない。実は、ラトゥールは後から、恒常化し安定した状態のモノ(object)と、作られつつある状態のモノ=物事(thing)を分けている(本稿では以下、前者を恒常化したモノ、後者を物事としてのモノと呼び分けることにする)。そしてラトゥールは、恒常化したモノも安定したままであるわけではなく、新たなエージェンシーが加わることで改めてグルーピ

ングが問われる、物事としてのモノになる可能性を持つとしているのである(ラトゥール, 2019, 133 注 80, 226)。

そしてアクターとの関係である。ラトゥールにおいては人間とさまざまな非人間がアクターとなりうる。そしてこの非人間には、ラトゥールにおける恒常化したモノも含まれる。先の自我や機械の例にも示されているように、グループ=ネットワークのまともりは、アクターでもありうるのである。

さて、以上のラトゥールの所説を筆者の視点で読むなら以下のようになる。まず、動的ネットワークのグルーピングとは、ハイブリッド化の過程・状態として理解できる。その際、中間項、媒介子がハイブリッド化の際の要素間のつながりを現す、あるいは生み出す。物事としてのモノは、筆者のハイブリッド化の過程・状態にあるモノ、ヒト、コトであり、それはモノ、ヒト、コトが出会う状態にあるという意味において、筆者の考える出来事でもある。恒常化したモノは、筆者のハイブリッド体(=既存)としてのモノ、ヒト、コトにあたる。物事としてのモノ=ハイブリッド化する過程・状態には、既存のモノ、ヒト、コトや、そのために創作されるモノ、ヒト、コトが、メンバー、すなわちアクターとして参加する。新たな創作とは、物事としてのモノから恒常化したモノになることを企画するコトである。付け加えておこなれば、以上の恒常化したモノは、デランダにおける集合体に、動的ネットワークのグルーピングはデランダにおける領土化=集合体化の過程に、物事としてのモノはデランダにおける集合体を構成する可能性のある要素に、対応させることが可能と思われる。

加えて、ローカルな場所とネットワークの関係について、ラトゥールは、グローバルをローカル化するという文脈で述べているが、これはその文脈だけでなく、サイバー空間とリアルな場所との関係として読むことも可能と考える。リアルな場所とサイバー空間の関係については、さらに、ハード=モノの中間項としての働きと、ヒトの媒介子としての働きが問われることになるが、それはまた、デランダの非線形的因果のテーマにもつながる課題でもあろう。

3. 固有性のさまざまなとらえかた

ここまでデランダ、ハーマン、ラトゥールが、何を対象とし、アプローチしようとしているのかを見てきた。そこで次に、それぞれが対象の固有性をどのように考えているか、さらにそれを、どのように経験的にとらえようとしているのかいないのかを追究することにした。デランダにおいては、領土化/脱領土化で明らかなように、集合体の固有性は、まず同一性の特徴として考えられる。ではその特徴はどのように理解されているか。デランダによれば、集合体の同一性は、領土化・コード化の過程の産物である。また、脱領土化・脱コード化をはらむ不安定な、つねにはかない状態にある(デランダ, 2015, 56-57)。「歴史的に偶然的な」(historically contingent)ものである。(デランダ, 2015, 75)。また、先述のように、集合体はその構成要素の相互作用から創発(emergence)する特性(property)を持つ(デランダ, 2015, 12)。液体としての水、固体としての水、気体としての水は、その例である。さらに、集合体は「異なった規模を持つ個的な特異性(individual singularities 筆者補足)(ないしはこのもの性 haecceities 以外のなにもものをも含まない」(デランダ, 2015, 57)、独自(unique)で特異な(singular)個的(individual)なものである(デランダ, 2015, 75)。実際に実体として存在している対象は、不安定であっても、歴史的に同一性を持ち、それは独自なものであるということである。この固有な歴史的同一性の理解は、デランダについて特に注目すべきものであると言えよう。

このデランダの歴史的な同一性の固有性というとらえ方には、同一性の固有性という側面と、その同一性が不安定さを持って維持される過程という側面、さらに、新しく生まれる固有性という側面、が含まれていると理解できる。そしてこれら三つの側面は、固有性の三つの様態としても、集合体が同時に三つの側面を持つと理解できるという意味としても、本稿のテーマにとって興味深いものである。ではそれを経験的にどのようにとらえるか。

デランダは、創発性について「全体の特性をその諸部分の特性へと還元す

る」ことはできない、全体の特性は、「構成要素の特性の集積ではなく、構成要素の能力を実際に行使することの結果だからである」（以上いずれもデランダ, 2015, 22）と言う。さらに続けて、安定と不安定について「一つの同じ集合体には、その同一性を安定化させるべく作動する構成要素だけでなく、同一性に変化するよう矯正するか、異なった集合体へと変容させる構成要素がある。一つの同じ構成要素は、能力のさまざまな組み合わせを行使することで、両方の過程に関与する」（デランダ, 2015, 24）としている。

つまり、安定に関わる構成要素と変化に関わる要素があると同時に、同一の要素が安定にも不安定にも関わることもある、ということである。ではこの構成要素の異なる働きをどのようにとらえるのであろうか。また、対象の特性については、構成要素の特性に還元することはできないとしているが、構成要素の特性とまったく無関係なのであろうか。還元するのではなく、構成要素の特性との関係を明らかにすることが必要ではないのだろうか。デランダは、構成要素の物質的役割、表現的役割、さらにコードなどのカテゴリーを駆使して「ネットワーク」「共同体」「組織」「都市」「国家」などを説明している。しかしそれは、実体として存在する集合体の説明である。そこからもう一歩進めて、それら集合体の変化や創発の動態、すなわち集合化（＝ハイブリッド化）を、構成要素のカテゴリーを用いて描き出すことが求められる。ここに前節で指摘したラトゥールの動的グルーピングや、物事としてのモノの理解との接合が求められると考える⁶⁾。

次にハーマンである。ハーマンの場合、存在論という、変化よりも変化の背後にある本質を追究するため、デランダともラトゥールとも違う見解をもつ。デランダ、ラトゥールが「存在から過程へ」という大きな思潮に沿っているのに対し、あえて過程ではなく存在を問い、両者とはいわば逆方向に議論を展開する。それは次の一節に表される。「対象（object）という用語を、構成要素にも効果にも言い換えることができない、実体（entities）に言及するために用いる」（Graham Harman, 2016, 3）。そのハーマンにとっては、対象の固有性は重要なテーマである。曰く「モノ（things 筆者加筆）は多種多

様 (multiple 筆者加筆) であるよりも唯一特異 (singular 筆者加筆) である」(ハーマン, 2019, 28)。

ハーマンは、この視点に立って、オランダ東インド会社を一つの対象として、その創生、成熟、衰微、終焉、刷新の可能性を、自律するいくつかの対象の共生によって説明している。共生とは自律して存在する・自律すべく存在してゆく対象が、出会い、相互作用をしつつ存在してゆくことである(ハーマン, 2019, 60-69)。オランダ東インド会社という対象は、それに関わった主要な対象が、それぞれに自律して存在する過程で関係し、創生し、自律し、成熟し、刷新の可能性を模索しつつ、終焉を迎えた。そこにおいて対象は、それぞれに存在する・存在してゆくゆえに共生という関係をもったのであり、唯一特異な固有性をもって存在した、ということである⁷⁾。

では、その対象をいかにとらえるか。先に本稿では、ハーマンにおいては“新しい対象がどのような構成されるのかが不明である”としたが、それはハーマンによれば、共生によってであるということである。この理解は、先の形相論にも示されていたのであった。しかし、それをいかに経験的にとらえるかについては、注意が必要である。ハーマンは、“対象を、経験的に得られる性質の束や、他の事物への影響や関係の束に還元して説明する考え”を批判している。デランダとの対話においても、一貫して「特性(property)」、感覚的性質には距離を置いている。形相は、感覚的の性質と切り離されてはいないが、それに解消されない感覚的对象における実質的性質の現われである。ハーマンによれば、それは理論的追究によってのみとらえられるのである。オランダ東インド会社の盛衰、それをハーマンはどう説明するのか。それにあたっては歴史的資料を用いる。特徴はその扱い方にある。「共生は名詞で表現される二つの対象の接続にある」、「名詞は人称、場所、モノである」(いずれも、ハーマン, 2019, 72)として、オランダ東インド会社の盛衰に関わった特定の人物：総督クーン、場所：パタヴィア、スパイス諸島、マラッカ、モノ：スパイス、毛織物、コーヒー、紅茶に着目する。そして、これらの諸対象の共生を描き出す。だがそれは資料を用いて詳

細に出来事や関係を積み上げて歴史を描き出す手法によってではない。理論的な想定、フレームを以て資料を扱うのである。

これには、その想定やフレームの妥当性がどう判断されるのかという疑問が残る。とはいえ、分析を導く、試行のための想定であれば、これはこれとして有効な方法であろう⁸⁾。しかし、社会学の視点では、ここが存在論の哲学者ハーマンとすれ違ところであるが、感覚の対象が感覚的性質とは切り離されていない以上、経験的な感覚的性質をとらえることの意味はあり避けることはできない、むしろ、感覚的性質がもつ、デランダにおける表現的役割、ラトゥールにおけるエージェンシーとしての意味は重要であると考えらる。

それでは、ラトゥールは固有性をどのようにとらえ、どのように経験的にアプローチしようとしているのであろうか。ラトゥールは特に固有性を語ってはいない。しかし、ラトゥールのモノ、グループなど、つくられつつあるもの、つくられたものは、固有性を持つと考えられる。これは、まずは「厳然たる事実 (matter of fact)」= 恒常化したモノと「議論を呼ぶ事実 (matter of concern)」= 物事としてのモノの説明に沿って考えることができると思われる。「議論を呼ぶ事実」は、それが何であるかを確定するために、「不確定性が高く、激しい議論を呼びつつも、実在しており、客観的で、非定型的で、何よりも関心を引くエージェンシー」が集められる、とされる。他方「<厳然たる事実>とは、<議論を呼ぶ事実>が平板化したもの」である(ラトゥール, 2019, 218) とされる。固有性は単一化され、事実として示されるのである。

つまり、物事としてのモノは、恒常化したモノ、グループが生まれる、あるいは変化する際に現われるネットワークの状態であり、それが何であるかのアイデンティファイ=固有性が問われている過程である。ということは、物事としてのモノは、アクターのまとまりであるとともにエージェンシーの集合でもあり、アクターの顔ぶれとしても、エージェンシーのまとまりとしても、未だ多様性を含んだ緩やかなまとまりではあるが、固有性をもつので

ある。他方、恒常化し安定したモノ、グループは当然ながら固有性を持つ。また、その参与子である個々のモノ、グループも、その内的構成において固有性を持つ。それらは固有性を持って恒常化しているのである。さらにその固有性は、内容、つまりその参与子の顔ぶれ、その属性などだけでなく、参与子の多さ、ネットワークの空間的広がりや長さ、時間的長さ短さ、さらに、どこの、何に、いつ、つながったのかなどにおいて、固有性を示すことになる。

この恒常化したモノの固有性をどのようにとらえるのかを考えるには、まず、恒常化したモノ、グループの構成には、多くの非人間が複雑に関わっていることを理解しておかなくてはならない。これを、ラトゥールが「中間項」と「媒介子」の違いを説明する際に挙げた例から読み取ることができる。その例とは、およそ以下の通りである。ラトゥール曰く、絹とナイロンの違いを、「絹は高級な人向け」、「ナイロンは低級な人向け」を伝える「中間項」として扱おうとしたら、高級な人と低級な人の社会的差異は、絹とナイロンの科学的な違いとは関係なく存在し続けるだろう。生地の詳細部が取り沙汰されることは無駄となる。だが、化学面、製造面でさまざまな違い、絹とナイロンの感じ、手触り、色合い、輝きといった数々の物質的な違いが、たくさんの媒介子として扱われるならば、社会的差異と生地の違いのつながりが解明されるだろう（ラトゥール, 2019, 78）。

つまり、恒常化したモノも、その構成要素は無数の媒介子となりうる違いを備えている。それは無数のエージェンシーになる可能性でもある。また、その製造過程とのつながり、さらに商品の持つ社会的意味づけを担っているのである。

ここで取り上げられているモノの特質は、ハーマンにおいて固有性の重要な要素であるが、ラトゥールはそれを感覚的性質に踏み込んでとらえていることが確認できる。また、その際の対象に対する複数の視点・側面からの細部の違いの分析と、その媒介子としての扱いは、デランダにおける集合体の構成要素の物質的役割と表現的役割を具体的にとらえる方策を示唆している

と考える。さらにそれは、ハーマンの創生から終焉にいたる対象の経過、刷新の可能性を、物事としてのモノから恒常化したモノへの移行、そして恒常化したモノの構成要素の、その後のアクターとしての動きとしてとらえうることを示していると考ええる。

さてそれでは、ラトゥールにおいて、固有性はどのように認識され、アイデンティファイされるのであろうか。これをラトゥールは、参照フレーム（frame of reference）の相対論的適用を通しての共約可能性（commensurability）の保持と要約できる考えによって示している（ラトゥール, 2019, 28）。そしてこれを、別の箇所で「諸々の参照フレームを相対論的に結びつけるほうが、常識の示す絶対論的な（つまりは恣意的な）形で参照フレームを設定するよりも客観的判断の優れた源になるからである」（ラトゥール, 2019, 59-60）としている。相対論的とは、既定の、固定したフレームを適用しないことであり、共約可能性とは、さまざまなフレームの比較検討、取捨選択、関係づけなどを通して妥当なフレームをつくる可能性である。妥当なフレームによって固有性が固定される、つまり特定の視点からアイデンティファイされた固有性が単一化され事実として示されるのである⁹⁾。

だが、対象の固有性が特定のフレームによって固定されることによって、対象の豊富な固有性の可能性が見えなくなる。「<厳然たる事実>とは、<議論を呼ぶ事実>が平板化したもの」である（ラトゥール, 2019, 218）。対象は実際には豊かな姿を持っている。ところが、固有性を見いだすとその豊かな姿が平板化されるのである。

ちなみに、ラトゥールは、「自然」の扱いに対して次のように指摘している。「『自然』とされてきたエージェンシーの複数性が経験的に見られ、<厳然たる事実>という狭い区画からあふれ出ている。実在することと、議論の余地がないことのあいだに直接的な関係は存在しない」（ラトゥール, 2019, 209-210）。つまり実在する自然は、議論の余地なく事実化された自然とは違い、豊かな存在なのである。しかし、恒常化したモノは視界から消える、無

言になる、とらえにくくなるのである（ラトゥール, 2019, 149）。

この視界から消えた対象の豊かさにどう経験的にアプローチするか。アクターネットワーク論は物事としてのモノに焦点を合わせるところにその特色があり、その視点を生かした研究が多いが、ここではそれを踏まえつつ、恒常化したモノに着目することの意義を指摘したい。ラトゥールはモノの活動を可視化する状況のリストを挙げている。これは、ラトゥールがモノを経験的にどうとらえるかの方法を示すものであると同時に、恒常化したモノが多様な固有性を持つことを示すものと考えられる。以下、モノの活動を可視化する状況のリストまとめてみよう（ラトゥール, 2019, 151-153）。

第一に、さまざまな場や論争に見られるイノベーションを研究すること。「こうした場では、モノは、会合、計画、見取り図、規則、試行を通して明らかに複合的で複雑な生を得ている」。第二に、見知らぬ道具、外来の道具、古めかしい道具、謎めいた道具のように、扱い方がわからない、隔たりがある、新奇な状況を扱うとき。第三に、事故や故障やストライキなどの機会の遭遇したとき。この種の機会は、アスベスト、遺伝子組み換え食品、伝染病、地震、ディーゼルエンジンの排ガスなど、「リスクのある」モノにより増えている。第四に、アーカイブ、文書記録、回顧録、博物館の収蔵品など、すっかり後景に退いたモノに、光を当て直すとき。第五に、仮想の歴史、思考実験、SFなど、堅固なモノを流動的な状態にするものから学ぶこと。以上である。

このリストは、固有性を経験的にとらえるという本稿のテーマにとって、極めて有効と考えられる。さらに以下を指摘すべきと考える。ラトゥールは恒常化したモノを可視化するのには難しいと言うが、そうではなかろう。挙げられたようなケースは私たちの日常的な営為によく含まれると思われる。好奇心を持って街を歩く、小さな疑問について考える営みがそれである。また、恒常化したモノそのものが、その存在を気づかせる変化をし、見せもする。例えば街並みの維持や再開発を考える、組織の立て直しを図るなどの経過には、街や組織の衰退などの、恒常化したモノが可視化を促す過程が含ま

れていよう。恒常化したモノを可視化する機会は多くあり、その時、恒常化したモノはさまざまな視点から、さまざまなフレームによってとらえられ得る。多様に固有性が取り出される可能性を持つのである。絹とナイロンの違いでラトゥールが指摘したように、“恒常化したモノの構成要素は無数の媒介子となりうる違いを備えている。それは無数のエージェンシーになる可能性でもある”のである。

このようにとらえると、恒常化したモノは、多様に可視化される可能性も機会も持っている。恒常化したモノとしての実体にも、その変質過程にも、固有性が見られる。ラトゥールのモノを活性化する状況のリストは、モノ、ヒト、コトのハイブリッド体への経験的アプローチの可能性を大きく広げてくれるものと考えられる。

4. 固有性と認知フレームの多様性

以上、デランダ、ハーマン、ラトゥールにおける固有性とその経験的アプローチの理解を概観してきた。論点、視点において、それぞれから学ぶことが多い。それは適宜指摘してきたので、ここであえてまとめることはしない。ここでは、残されている事項、すなわち、存在、その固有性をとらえる際に不可欠な、見方、見え方、考え方に関わる、スケール、フレーム、ズームングについて扱っておきたい。それを、ラトゥールの所説を中心に考えることにする。

まずスケールである。スケールについてはデランダも言及している。デランダは、湖の水が、バクテリアと大きな魚では異なったりアリティとして存在し、それはスケールによると説明している (DeLand & Harman, 2017, 22-23)。水の性質、湖の広さ、深さ等々、生物の違いにより対象はことになって見える、受け止められる、ということである。人間には人間のスケールがある。われわれは通常人間のスケールでものを見、考えているのである。

とはいえ、人間は、デランダがいう人間のスケールにとらわれない可能性

を持つ。ハイテク技術を駆使した光学器具や電子装置を用いて、さらにはデータを数的処理して、小さい生物のスケール、大きな生物のスケールでの見え方を、部分的に疑似体験し、知り、考えることができる。これは時間のスケールにもあてはまる。人間の目では、通常、目の前の山は固定して見えるが、長時間のスケール、いわゆる歴史のなかでは変化することを考えられる。短時間のスケールでも、人間の目では固定して見えるが、器具を使うと刻々と起こる微細な変化を見ることができる。長時間のスケールは古くから考えられたものであるが、短時間のスケールの疑似体験は、やはりハイテク技術が実現したものである。人間は人間のスケールで見たり考えると同時に、他のスケールで見たり考えたりすることが、ますます可能になってきていると考えられる。

ラトゥールは、「スケールとは、アクター同士が、種差的な痕跡を種差的な乗り物で移送することで、スケールを設定し合い (scaling)、間隔を設定 (spacing) し合い、コンテキストを設定 (contextualize) し合うなかで打ち立てるものである」(ラトゥール, 2019, 353) と説明している。そして分析者は、アクターが設定するこのスケールを尊重すること、分析者の絶対的なスケールを押しつけることはしてはならない (ラトゥール, 2019, 354)、また、アクターはさまざまなスケールを駆使する、唐突にスケール転換するが、それに「出くわした場合に、分析者が唯一取り得る解法は、転換そのものを自分のデータと見なすことである」(ラトゥール, 2019, 355) とも指摘している。

このラトゥールのスケールについての説明には、次の3点が含まれている。まず、スケールは生物種のようなグループだけでなく、人間のいろいろな集合体、グループにもあると考えられる。次に、分析者は、種やグループに固有のスケールについて、分析者がそれまで取り出したスケールや固定した基準を押しつけてはならない。そして、アクターはスケールの駆使、転換を行うものであり、その駆使、転換をデータと見なすことが必要である。以上である。

大切なのは、種やグループのスケールとは、当該アクターたち、当事者のスケーリングによって定められるものだという事、それゆえ、グループ内の見方、考え方の尺度を、アクター同士が相互にどのように設定するのか、そこで動因されるスケールはどのようなものかを、行われるスケールの駆使、転換を含めて、探ることである。そこには、上述した、スケールの疑似体験、それを基にした思考も含まれることになる。

次にズームングである。ズームングとは表示の拡大と縮小のことである。これによって対象の見える範囲、大きさ、細かさなどが異なる。ラトゥールはズームングについて、以下の諸点を挙げている。すなわち、まず、見る対象、見る定点、見方などを特定せず、ズームングのサイズを変えて並べても意味が無い。次は、分析者が特定のサイズを固定させて見るのではなく、「アクターが尺度を決める」ことを見るべきである。そして、現実には、「サイズが瞬く間に反転した数々のケース」があり、諸々の出来事にはサイズがごちゃごちゃに割り当てられている上に、すごい速さで伸び縮みしている。これを観察することが必要である（ラトゥール, 2019, 357-358）。

ここにはズームングの基本的要件と、アクターに沿ってアクターのズームングを取り出す必要性についての指摘があると理解できる。ズームングの基本的要件とは、分析者にとっても当該のアクターたちにとっても、ズームングによって、何を対象とするのか、その対象について何を見るのか=焦点、どの角度から見るのか=視点、なぜそのズームングを行うのか=サイズ選択の柔軟性と選択の意味があり、対象のサイズに合わせて適切にサイズ・焦点を対応させる、さらに対象の持つつながりの変化によって生まれる対象のサイズの変化に合わせる必要があるということである。そして何よりも大切なのは、アクターたちが、どのようにズームングしているかを取り出すことである。アクターたちはさまざまにズームングのサイズを変える。それによって「数々の結びつきを通して他の多くの場とつながって」いる。その出会いの様子をとらえることが必要だということである。

このズームングについては、先のスケール以上にハイテク技術の影響が大

きいであろう。サイズの選択幅が広がっており、アクターたちのズームングの転換、つながりの幅を大きく変えると思われるからである。

最後にフレーミングである。以上のスケール、ズームングは、フレーミングと密接な関係にある。フレームは、もっとも基本的には、対象を見る、考える際に対象をどの範囲で、どのように切り取るかを指す。それには視点、視角が伴う。それによって見えてくるモノ、コトが異なる。という意味でフレームは、まず認知のフレームという性格がある。しかし、フレームはそれだけでなく、意味・意味づけを伴う。これは評価のフレーム、さらに判断基準のフレームといった社会的な性格を付帯したものとなる。

スケール、ズームングは、基本的な認知フレームの性格、サイズが問われるものであるが、スケールの持つ特徴がフレームとみなされる場合や、特定の意味づけが特定のズームングに固定されてフレームとなっている場合のように、そこに意味・意味づけが付帯することがある。

これらのことを踏まえて、ラトゥールがフレーム、フレーミングについてどのような指摘をしているかを見よう。まず前節で固有性のアイデンティファイの仕方について触れた際に示したとおり、ラトゥールは既存の固定したフレームの安易な適用を戒めている。参照フレームの相対論的適用を通して、共約可能性が追究されるべきである。さらに、「物事をもっと広いコンテキストの中に入れる」として大きなフレームや「全体」を一望するフレーム、たとえば「後期資本主義」「西洋」「モダニティ」「グローバル化」などを持ち出すことを戒めている（ラトゥール, 2019, 358-359）。これらのフレームは、具体的な対象について、アクターたちの活動、ネットワークのつながりについて経験的な追跡を行い、その結果を巡ってなされる、多くの相対的な参照フレームの適用と共約可能性によって求められるものであって、はじめからあるものとして適用し、記述に用い、説明する用具として扱ってはならないのである。

ラトゥールが興味をもつのは、パノプティコン＝全面監視・一望監視のフレームではなく、オリゴプティコン＝「駅の改札口のように、狭いところに

集中させて眺める場や仕組み」(ラトゥール, 2019, 348) のフレームであり、「フレーミングを、自動的に得られる資源ではなく魅力的な新たなトピックにすること」(ラトゥール, 2019, 360) である¹⁰⁾。

ラトゥールはフレーミングに着目する、それはフレームが、モノ=対象や場や仕組みが何であるかのアイデンティファイに関わるだけでなく、ネットワークの中間項、媒介子による移送にも関わるからであろう。特に媒介子においては、さまざまな参照フレームの競合状態や、フレームの転換が問われるであろう。ラトゥールがオリゴプティコンに足を据えるのは、スケーリング、ズームングにおいてと同様、アクターたちに沿うことを大切にするからである。その場には多様なフレームが出会うのである。

ただしここで次の点に留意しておきたい。それは現在、その場すなわちオリゴプティコンは、パノプティコンの発想によって管理されている可能性がある場であり、その中で、それを前提にして、アクターたちのフレーミングが行われるようになってきているということである。

最後に、フレームの多様性について、あらためて確認しておくことがある。それは、同一の対象についての、スケーリングの違い、ズームングの違い、さらに意味づけ・評価による違いという意味でのフレームの多様性だけでなく、視点、視角の違いによる違いがあるということである。ラトゥールが“恒常化したモノの構成要素は無数の媒介子となりうる違いを備えている”という時に想定しているのは、視点、焦点の置き方の違いによる多様性である。モノは物事としてのモノの時点では特定の視点、焦点のもとに固有性を問われる。そしてアイデンティファイされて恒常化したモノとなる。しかし、物事としてのモノであれ、恒常化したモノであれ、その多くの構成要素はさまざまな側面を持っている。わかりやすく、絹とナイロン、さらに木綿、麻をくわえても良い、これらを素材とした洋服の違いを例にすれば、色(色彩、明度、派手、地味、ムラ、にじみ等)、光沢(にぶい、艶がある、光りすぎる等)、手触り(滑らか、柔らかい、しっとりとしている、指に引っかかる、ざらざらする等)、厚さ(厚い、薄い、頼りない、ごわごわする

等)、重さ(重い、軽い、羽のよう等)、質感(高級感、安物感、風合い等)、形(新奇、伝統的、流行の、若者向き、高齢者向き、細身、ゆったり等)、以下、細目は省くが、縫製の仕方、値段、さらにそれらを実現している原材料の入手先、ルート、制作工程、職人、工具、機械等々について、それらの細目について、何のどこに視点、焦点を合わせてこれらをとらえようとするか、何のどこが問題なのかによって、異なった姿が浮かび上る。異なったフレームが工夫され、採用される。対象はそのフレーミングの違いによって、異なる固有性を持つことが示されるのである。

これはデランダにおける歴史的同一性の固有性についても言えることであろう。ハーマンは、多様な形相を説くことによって、対象が多様な固有性を持つと言う考えを回避しようとしているが、対象の多様な形相は、少なくとも社会学的には意味があることであり、それはフレーミングの多様性として理解しうるものであろう。

対象の固有性の理解は様々あり得るが、それらでいかなるスケーリング、ズームング、フレーミングが、どのように用いられているかを、対象に沿って把握することが不可欠である。この点についてラトゥールから学ぶことは多い。

まとめ——ハイブリッド体、ハイブリッド化の固有性

現代社会はモノ、ヒト、コトのハイブリッド化を推し進める社会である。ハイブリッド化は、新しいハイブリッド体を構想し、作り出すことによって進められている。伝統的な固有性、独自性を守る、古い街を再開発する、組織改革する、新しい企画を立てる、新商品をつくり出す。さまざまな領域、場面での動きは、ハイブリッド化によって進められている。そして、こうしてつくられたモノ、ヒト、コトの具体的な実体は、つくられる際に与えられた固有性、独自性を持つばかりでなく、その固有性、独自性を持つための構成要素、部分が、固有性、独自性を持っている。そして新しくつくられ

たモノ、ヒト、コトは、実体化され他のモノ、ヒト、コトと共に存在し相互作用する歴史を持つことによって、それぞれ独自の歴史を持ち、さらに、固有性、独自性を獲得してゆく。それは、創生から、成熟、消滅の過程、および刷新の可能性を持った、固有性、独自性でもある。それらは、部分の劣化、消滅、入れ替え、補修等による、実体の維持、修正、改変、再生、消滅などによるものであり、これもハイブリッド化の過程である。新旧のモノ、ヒト、コトが相互につながりを持ち、あるいは混在している具体的な場面とは、実は固有性、独自性に溢れた空間であり、時間である。本稿は、この対象について、筆者のハイブリッド社会論の視点に立って経験的研究を進める手立てを探ったが、デランダ、ハーマン、ラトゥールの異なった視点からの固有性、独自性のとらえ方のそれぞれに接点を見いだせた。具体的な経験的アプローチについては、特にラトゥールの「モノの存在を可視化」し、モノの動きに寄り添う方針から多くを得られた。サイバー空間、AI、遺伝子工学などがもたらすハイブリッド化の新しい局面について十分に言及できなかったが、これは、はじめに示した(4)偶然性、ヘテロジェティの可能性のテーマとともに明らかにして行きたい。

注

- 1) ラトゥールはさまざまな理論的系譜に立つが、本校の趣旨では特に、A・N・ハホワイトヘッドの、過程として実在のあり方をとらえる考えを軸にその方法論を展開している点が重要と考える。また、アクターネットワーク論はすでに科学論や地理学、都市研究において経験的な研究に応用されている。デランダはドゥルーズとガダリの *assemblage* 論に基づいて、その集合体論を展開している。ドゥルーズ、ガダリの *assemblage* 論を応用した研究例はあるが、その中でデランダの今回取り上げる研究は、ドゥルーズらの考えを最も体系的に展開したものであり、集合体の構成についても一歩踏み込んだ考えを示していると思われる。しかし、経験的研究への応用はまだ多くはないようである。ハーマンは、E・フッサールの現象学、M・ハイデガーの存在論を批判的に検討し、ハイデガーの存在への問いの限界を乗り越えようとしている。ハーマンの場合、いわゆる経験的アプローチとは異なる方法を用いている。また、ハーマンは、デランダ、ラトゥールとの対論、そこでの批判を通して

自らの考えを明らかにする手法も用いており、これらの対論を通して三者の理論的異同を知ることができる。

Graham Harman (2009) *Prince of Networks: Bruno Latour and Metaphysics*, re. press. Graham Harman (2011) *Immaterialism*. Polity. Manuel DeLanda and Graham Harman (2017) *The Rise of Realism*, Polity. 本稿は、三者についてその説くところを検討するが、目的は筆者の考えるハイブリッド社会論にとって何を学ぶうるかであり、三者の哲学的追究ではないことを確認しておきたい。

- 2) 栗原 2019, pp.58-61 でも例を挙げて説明しているの、参照されたい。
- 3) この相対的關係とズレは、栗原, 2019 の純粹型としてのハイブリッドとヘテロジェニティの關係につながる。ここでは、ズレについて、内包關係におけるズレ、内的ハイブリッド構成におけるズレ、そして、ハイブリッドの二つの面間のズレが考えられることのみを指摘しておく。
- 4) 栗原 2018, pp.29-35 を参照のこと。
- 5) これは、今回対象としたデランダの研究についての評価であり、他の assemblage 論者が、筆者が関心を持つ都市を対象とした研究を展開していること、またデランダの assemblage 論が、さらに經驗的研究に広く活用される可能性が大いにあることは述べておこう。
- 6) ドゥルーズらの assemblage 論に基づく經驗的研究はあるが、デランダの assemblage 論の、特にその構成要素の理解を踏まえたものは管見によれば未だ少ない。その中で、ラトゥールとデランダの双方を生かして行った興味深いものとして、以下の研究がある。Patricio Davila (2017) “Visualization as assemblage”, *Information Design Journal*, 23 (1), 19-31.
- 7) 栗原 (2019, pp.61-63) では、対象が時間の経過と共に変化することについて、ハイブリッド体の構成要素の経年変化として示した。ハーマンの、対象の生成から消滅まで、また刷新の可能性というとらえ方、また、そこにおいて構成要素を個々の実体として考える点は、この筆者の考えに近いと思われる。
- 8) 栗原 2018, pp.35-39 は、基本的にこの方法に依っている。
- 9) この、妥当なフレームの相対論的適用を通じての設定は、ハーマンのフレームの選択的適用という方法と対比できる論点であろう。
- 10) ラトゥールはさらに、このオリゴブティコンのフレームワークを蓄積しつなぎ合わせて求めてゆく全体像としてのパノラマを論じている。そこでは安易なパノラマの描写、パノラマのつなぎ合わせた全体像を集合体や共通世界と取り違えてはならないよう注意している (ラトゥール, 2019, 360-365)。

資料

- デランダ・マヌエル (2015) 『社会学の新たな哲学』人文書院、Manuel DeLanda (2006) *New Philosophy Of Society*, Continuum.
- DeLanda, Manuel and Graham Harman (2017) *The Rise of Realism*, Polity.
- ハーマン・グレアム (2017) 『四方対象』人文書院、Graham Harman (2011) *The Quadruple Object*, Zero books.
- ハーマン・グレアム (2019) 『非唯物論』河出書房新社、Graham Harman (2011) *Immaterialism*, Polity.
- 栗原孝 (2018) 「街で多文化をとらえる：街の文化空間のハイブリッド性とその分析フレーム」国際関係紀要第 27 巻、第 1・2 合併号。
- 栗原孝 (2019) 「ハイブリッド社会論の視座－モノ、ヒト、コトのハイブリッド化のとりえ方－」国際関係紀要第 28 巻、第 2 号。
- ラトゥール、ブルーノ (2007) 『科学論の實在』産業図書、Bruno Latour (1999) *Pandora's Hope*, Harvard University Press.
- ラトゥール、ブルーノ (2019) 『社会的なものを組み直す』法政大学出版局、Bruno Latour (2005) *Reassembling the Social*, Oxford.
- Mike Michael (2017) *Actor-Network Theory*, Sage.

